

あ い さ つ

兵庫県立夢野台高等学校

校長 山根 邦雄

兵庫県南部地震のために犠牲となられました方々のご冥福を心からお祈りいたします。また、被災されました皆様に心よりお見舞い申し上げます。この度、先生方のご努力により消しがたい爪痕を残した大震災についての、生徒諸君、先生方、その他本校に震災時間係された方々の記録と感想をまとめた記録誌が発刊のはこびとなりましたことを大変喜んでおります。この大震災の苦しくつらい体験を風化させないために、またこれらの体験をお互いに分かちあうために、この記録誌を発行することとなりました。寄稿いただきました方々に厚く御礼申し上げます。

平成7年1月17日未明に起こりました未曾有の大震災のため夢野台高等学校も直接、間接に大きな被害をうけました。昭和2年完成の当時東洋一と言われた本館は関東大震災の影響で設計、施工とも当時の技術の最高のものが駆使されており、ほぼ無傷で残り関係者を驚かせました。しかし、昭和46年に完成しました本館南側の特別教室棟は鉄筋の柱が何本も大きな被害を受け使用不可能になりました。両棟の完成年次には、約45年の開きがあるにもかかわらず古い建物が生き残ると言う結果を残しました。このことについて新聞もかなり詳細に報道しています。校舎以外では、本館北側の擁壁がほぼ全面倒壊し、土砂が本館に押し寄せ電気室を壊しました。また、現在建築中の新校舎の南にある親鸞会の所有地の石垣も同様に崩れました。

大震災の朝、私は、生徒諸君・職員の安否と学校の校舎の損傷状態を心配しながら、電車が不通のため午前7時に車で鈴蘭台の家を出て、眼下に煙を上げて激しく燃える長田の街を見ながら夢野バイパスを下りました。それはまるで湾岸戦争時の空爆の光景を想起させるものでした。房王寺線を右折すると、校舎に相当な被害を覚悟していましたが、本館がいつもの如く無傷でたっているではありませんか。これで授業ができるとひそかに安心をしました。学校には7時20分に到着しました。その時すでに周辺の方が多数学校に避難しておられ、学校を避難所として開放して欲しいとの強い要請をうけました。非常事態で止むを得ないと判断し、体育館、一部の教室、グラウンドを開放することにしました。最初の夜は停電のためローソクの明かりで住民の様々な要請に応え、安否の確認、食糧の確保、電気の復旧などの仕事を行いました。大震災のため職員の確保も難しく、電話も受信だけで、外部との連絡もままならず始めの10日間は悪戦苦闘の毎日でありました。

生徒、職員の安否の確認には一週間を要し、1月23日には在校生全員無事が確認されほとと胸をなでおろしました。震度7の地震で長田区、兵庫区で全壊、全焼の家屋が多数にのぼり、道路の陥没、ライフラインの途絶といった悲惨な状況でした。震災のため神鉄が不通となり、残念ながら生徒の通学の足が確保できず3週間の休校の止むなきにいたりました。バス輸送で北区から生徒を運ぶ案も浮上しましたが、道路の大混雑で実現に至りませんでした。2月7日にやっと鈴蘭台、長田駅間が開通し、2月8日から午前中の授業ができるようになりました。水道、ガスが使用できない中で、2月20日からは体育の授業を除く5限の授業が実施できるようになりました。授業の遅れを取り戻すために3月は休日である第2土曜日も授業を実施し、例年であれば高校入試前に3学期の成績処理を終了して

いますが、期末試験を高校入試後に実施し、終業式を3月30日に行うといった異例の日程になりました。このためTV局や新聞社が終業式を取材し、それを記事にしたり、放映するなどのこともありました。

ところで、この震災の教訓は一体何でありましょうか。一つには、自然のエネルギーの膨大さを痛感させられたことであります。東灘区では阪神高速道路の橋脚が何本も倒壊したり、10階以上の建物がおおしく傾いたり、港湾施設の破壊や、人工島を結ぶ橋の損傷、神戸高速鉄道の大開駅の倒壊、オフィスや家庭でも重い金庫やピアノが動いたりして、あらためて地震の持つエネルギーの大きさを感じました。神戸は平地が少なく、それを補うためにポートアイランド、六甲アイランドといった人工島をつくり、それらを結ぶための道路、交通機関をつくりましたが、予想を越えた地震が襲いこれらの施設が大きく損傷を受けることになりました。人間の知恵の結晶であるハイテクを駆使した鉄道、高速道路が自然の猛威の前に屈した結果となりました。自然の災害は人間の力を越えたところで起きることを知り、人間の持つ力の限界を改めて認識することになりました。

二点めは、各地からやってきたボランティアの活躍でした。体育館で不眠不休で治療にあられた第一生命の医療チーム、曹洞宗の炊き出し部隊、岡山県からやってきたお風呂のサービス、ホームステイの申し出などいろいろなボランティアがやって来て避難住民のために奉仕をしました。また、本校の野球部の諸君が大開小学校に泊まり込んで避難者のため救援活動を続けたことをはじめとして多くの生徒諸君がボランティア活動に参加してくれました。震災のため人を助けることの大切さを体験できたことは、とかく知的トレーニングに重点をおきがちな学校の活動に別の視点から光をあててくれました。震災は、まさにlearning by doingの良い機会を提供することとなりました。

三点めは、この非常時にあって神戸市民が比較的冷静に行動しパニックに陥ることがなかったことであります。一時食糧や水の心配をしなければならない時期もありましたがみんな列をつくり辛抱強く待ちました。交通信号が作動しない時もありましたがドライバーはお互い譲り合いの精神で運転しました。バスが走らないときは歩いたり、自転車でオフィスと自宅を往復しました。みなエゴを抑えて震災を乗り切りました。困難な時ほど人柄、国民性がでるといいます。この震災で神戸市民が人間性の醜い面をさらけ出すことなく、冷静沈着に行動できたことは高く評価できると思います。

四点めは、震災のためお互いに助けたり、助けられたりして人の暖かさ、家族の温もりを確認できたことです。家庭でも、職場でも物心両面にわたり困難な状況で乏しい物を分け合い、相手の気持ちになり、助け合いました。また、私は、国内だけでなく外国人の友人からもお見舞いの手紙を頂きました。テレビが阪神大震災について全世界に報道した結果ほんとうに多くの人から神戸の状況、家族の安否について心配をいただきました。いまさらながら国境を越えた人情の厚さを再認識した次第です。

最後になりましたが、本校の被災生徒救済のため設立しました震災教育援助基金のために親薦会、PTA、本校教職員の皆様から予想を越えた御厚志をお寄せ頂き誠に有り難うございました。この紙面をお借りして厚く御礼申し上げます。基金は主に被災生徒の学習費等の支払に充当させていただきました。震災のために心配されました新校舎は若干の遅れはありますが本年10月には完成の予定であります。

生徒諸君が今回の未曾有の震災の体験を永く記憶にとどめ、それから多くの生きた教訓を学び、今後歩むであろう人生の糧にさせていただくことを願いたします。

共 感

同窓会（親蔭会）

名誉会長 白 井 喜美子

平成7年1月17日午前5時46分、この度の地震を経験した者にとって、生涯忘れ得ぬ時刻です。強い衝撃に目を覚まし、反射的に布団を被り、身をまるめ、息をこらすと、一瞬衝撃が止んだと思った途端に、今度は左右への大きな横揺れ、布団毎ゆさぶられ、何といたすごさだということのみ思っていました。随分長い間揺られていた様に思いますが、後になって聞けば20秒との事、あの時の気持は何と表現してよいのか、でも私の頭にしっかり焼きついています。揺れが静まり、手探りでそこに置いてあったはずの携帯ライトを、色々な物の被さった中に探しあて、まず、ベランダへの戸を開け、次に落下物の下になっていた普段着をひっぱり出して身に着け、襖を開けますと、隣の部屋の本箱は倒れ、物入れの戸は開いて中の物は掘り出され惨澹たる状態、階下へ降りていくと、そこも家具が倒れて物が散乱し、足の踏み場もない有様、その上を踏みしめて外へ出て驚いたことに道路の向側の石の角材を積みあげた20米程の長さの岩乗な塀が崩れ落ちているのです。我家の並びの一軒おいて隣もその隣もべっしょんこに潰れてしまっていました。あの揺れは、こんなひどいことをしたのだと呆然となりました。その時神戸全体の大惨状には思いも及びませんでした。後でこの地震で大変な数の方々が無くなられたことを知って（その中に親蔭会員他親しい方も何人かあって）、亡くなられた方々に哀悼の意を捧げつつ、今ここに命を持っていることに、助かった命のあり様を考えてしまいます。

電気は3日目につき、テレビは5日目に写りました。電燈のついた夜の明るさに心が和み、テレビの写った時、世の中が開けた様な気になりました。それまで情報は新聞ラジオがたよりでした。我が家では水は2月7日、ガスは3月10日に出るようになりました。ライフラインの欠如の中での日常生活で、ふれあった人々のやさしさは、被災地での同じ思い、共感によるものと思えました。震災後逸早く訪ねてきて下さった方々、各地から安否を気づかって電話をかけて下さった方々に、人の繋がりや有難さを知りました。大変な被害を受けられた方々も、共感の響きあいが、多少は心の和ぎになったのではないかと思います。そして今、震災を通して、私共は人生にとって大切なものは何かといったことを考え直す機会が与えられた様な感じがします。

さて、今年平成7年は、夢野台高校創立70周年の年です。記念式典は見送られましたが、学校が70年間歩いてきたことは、心に留めたいと思います。2月27日卒業生への記念品贈呈と話を為す為に学校へ参りました。講堂のある本館は、この度の地震に大丈夫だったと前にお聞きしていましたが、この日学校へ行き、母校本館を仰いだ時、近隣の被害の中で、厳然と建っているその姿に、私はすっかり感動しました。そして50年前、戦争が終って母校を訪れた時、戦災に耐えて、そこに建っている姿に感激した思いが、再び蘇ってきました。この校舎の落成したのは昭和2年、私の女学校1年の時でした。落成式の日の事は、今も記憶に鮮やかです。こんな立派な校舎に学べる幸を体いっぱい感じていました。上村真理子先生のお話に寄りますと、本校の創立は大正14年ですので、その建築に際し、大正14年の関東大震災の生々しい経験が、建築者に強く働きそれが生きていたということ

す。この度の震災の経験は、今建築中の校舎にも、十二分に生かされることでしょう。私共の学校に寄せる思いを、新校舎に託したいと思います。

2月27日講堂に並んでいられた生徒さん達、随分と悲惨な思いをされた方も大勢いられたとおもいますが、それに堪えて、何事も起っていなかったかの如く平然としていられて、胸が熱くなりました。私にとって本年講堂で卒業生にお話をさせて頂いた印象は何時迄も心に残るものと思います。

私はこの地震を通して「共感」というものの重みを心に深く感じました。同窓生は青春の日々の思い出を通して共感しあえる仲間です。学校を共にすることによる共感の重みを同窓会 親鸞会の上にかみしめたいと思います。



(震災後の学校風景)

1・17から5ヶ月を振り返って

兵庫県立夢野台高等学校

PTA会長 金子 晃 司

あの時早起きして、ちょうど顔を洗っていた時と思う。ドンという音の後、一瞬何が起きたのか理解できなかったが、柱にしがみついて心の中で「早く揺れよ止まれ、止まれ」と祈っている自分に気がついた。揺れが止んで、息子が懐中電燈を持ってきてくれた。床には食器やグラスやピアノの上にあったスタンド等が壊れて散乱していた。また2階にいくと、タンスがバラバラになって、私の眠っていた上に倒れていた。揺れている最中は、ガラスの割れる音も、家具が倒れる音も耳に入らなかった。驚怖というものは、目や耳の感覚も、人への思いという心も一瞬の内、奪ってしまうものとびっくりした。

その後何回も余震がきた。ゴーという音のすぐあとにグラグラと来る。揺れる前兆の「ゴー」という音ほど気味の悪い音はないと思った。

西神戸有料道路から神戸、長田方面を見るとあちこちで黒い煙があがっている。会社に行く途中、灘駅付近の陸橋は段差が50cm以上あり、通れない。阪神新在家駅前の橋も橋脚から落下して通れない。いたる所で今まで見たことのない光景が眼前にあり、これが現実なんだろうかと、何度も自分に問いかけた程度であった。

PTAの方から電話がきた。数日後に迫った耐寒登山の実施はどうなるのかという問合せであった。学校も、校長先生も、PTA前会長へも電話連絡がとれない状況であった。兵庫や長田区の人達にとって登山など考えもしなかったかも知れない。しかし北区や西区の人達にとっては、実施が不可能な状況ではなかったので迷っていたと思う。灘区から北区に避難した方が「日本中どこも灘区と同じように大変とと思ってた」と語っていたことを思い出します。

2月4日震災後、初のPTA運営委員会が開かれた。校庭にはテントがいっぱい張られており、体育館も被災者が来て、学校内で約700名の被災者が避難していた。運営委員の中には自宅が全壊という方もいたが、元気に委員会に参加しており、頭が下がる思いであった。校長先生から生徒全員の無事も確認されたとのことで、まずは安心した。

あれから5ヶ月近く過ぎた今日、校庭のテントも減少してきたが、まだ40張程見られ、体育館と約200名がまだ避難していた。授業にも支障が生じ始めており、早く解決するよう、市や国の早期対応を切望している。

阪神大震災を参考に、地震直後に情報が伝わらなくても、被害を推定できるシステムを作った市や、消火栓からでなく、海水を利用して消火する訓練を行なっている市もでてきた。また多くの青年がボランティア活動に参加し、そこで心の何かが変わったと感じていた。更に兵庫県ではボランティア活動を授業の単位として認める方向でこのような活動を推進する姿勢になってきた。

困難に合った時、それを避けようとするのではなく、それを教訓にして良い方向ほ知恵を出していくのが人間であると思う。今回学んだ事を大切に、未来人から借りているこの地を住みよい社会にして、未来人にお返ししたいと願っている。